

あけぼの会奨励賞

「妻が乳がんになったとき」

石沢 由彦 (いしざわ・よしひこ)

43歳／団体職員／青森県

妻の胸に小さな影が見つかったのは三年前、職場の定期健診にマンモグラフィが導入された年だった。巷の噂を頼りに乳腺の診察を専門に扱う個人医院を探し、精密検査を受けた結果は良性の繊維線種。しかし一年後の経過観察で、線種の向きと形が微妙に変化したように見える—と医師が首を傾げる。紹介状を手に、総合病院の乳腺外来でさらに詳しい検査を重ねた末、乳がんと診断された。

結婚十五年目。体は小さいが明るくて元気な妻は、常に家族の真ん中で話題を振りまきながら生活を切り盛りしてきた。ガンを宣告されて真っ暗になった目の前に現れたのは、子供たちだったにちがいない。「まだ、死ねない・・・」病院から自宅まで二十分。重苦しい空気を乗せた車の中で、妻から漏れたひとり言は今でも心の奥に色濃く残っている。

一カ月後、摘出手術のために妻は入院する。妻に代わり毎朝見送る子供たちに、それぞれ重なる記憶・・・頼もしくなった背中が漠然とした自信へと膨らんで、不安な心を癒してくれた。超未熟児で生まれた長男の保育器に祈り続ける妻。長女出産のために、幼い長男と離れて四ヶ月の入院に耐えていた妻。命の尊さを胸に刻んだ妻が、仕事を抱えながら必至に守り続けてきた二つの命は、中学二年生と小学三年生に成長した。愛する子供たちが今、病氣と闘う妻にとっての心の支え。きっと、この子達が母を守ってくれる。

幸い、リンパ節への転移も見られず、患部の摘出で終わることができた。しかし、米粒くらいの小さなガンでも、切り取られた肉片は子どもの拳ほどの大きさ。術後二カ月に及ぶ放射線投与は、ガンの恐怖を心に刻んだ。

健康診断の乳がん検診は、四十歳以上の隔年実施。もしもマンモの導入が一年遅れたら、もしも妻の年齢が一歳違ったら・・・病魔はもっと広がっていたかもしれない。再検査に選んだ医院は乳ガンの発見率が高く、手術を施した乳腺外来はセンチネルリンパ節生検で豊富な症例実績を誇っている。もしも、別の病院を選んだら、違う結果になったかもしれない。ガンが宿ったことは不運としか言いようがないけれど、小さな幸を引き寄せて結びつけたのは、母と子の深い絆だと信じている。

手術から一年。経過観察と服薬はまだまだ続く。闘いは始まったばかり。負けるな妻よ、二つの命がずっと君を守るから。